



まさきの冬の

風物詩

今年も「まさきの冬の風物詩」が見られた。

正月に向けて漬けられた「緋のカブ漬け」。

新春を彩った「消防出初式」と「成人式」。

変わらずその季節が来れば、見られたり、あったりするから「風物詩」。

当たり前を迎えられた新年だが、震災のことを思えば、当たり前にあることが本当は当たり前ではない。

だからこそ今、考えてもらいたい。

「まさきの冬の風物詩」の価値を。

紅色に込められた想いと知恵

緋のカブ漬け

今季も変わらず緋のカブ漬けが見事な紅色に染まった。その鮮やかな紅色から、この地方では昔から正月料理の彩りに重宝されてきた。季節を感じる「ふるさと」の味だ。そこに込められた想いと知恵？



(松山城)の天守閣が見える畑でないと言われている。と育たない」とも言われていました。

この日は、加工部の相原君子さん、東古泉さんが作ったカブ30キロを8人で下ごしらえ。君子さんは「緋のカブは病気になるやすすいんよ。今年は小さくて少なかった」と少し残念そう。コズエさんは「気温の影響もあるやろね。いつもより数が少なくても、できてよかった。ちっちゃいから、かわいいね」と微笑みながら一つ一つ丁寧に汚れた部分を除いていきます。それを輪切りにして、漬物桶へ。塩をふってフタをし、重石をしてこの日の作業は終了。2日間寝かせました。

12月12日、メンバーは松山市農協北伊予支所の調理室に集合。いよいよ本漬けです。まず、塩漬け後のカブをネットに入れて、「ぎゅつ」と脱水。そして、カブに砂糖、酢、カブスを合わせて漬けていきます。

あの独特の紅色の秘密はここにあります。カブに含まれているアントシアニンが酢の酸と反応して天然発色しているのです。「みかん王国・愛媛」にふさわしいカブですが、さらに鮮やかな紅色に発色させます。そして、緋のカブ自体が、気温15度以下の環境で育ったものでないと色がつきにくいと言われているため、季節が来なければ、緋のカブは紅色にはなりません。

まさに自然から授かる恵みの色です。

12月19日、見事に紅色に染まった緋のカブ漬けを袋詰めする皆さん。その表情はとってもしようです。「離れて暮らす家族から『今年はまだ？』って催促されるよ。懐かしいふるさとの味なんや。作り続けたいかんね」と微笑むコズエさん。コズエさんが伝え残そうとしている緋のカブ漬けには、自然の恵みに感謝しながら食生活を営んできた先人たちの想いや知恵が込められています。緋のカブ漬けが風物詩として当たり前に見られるのは、こうして「守り」伝えようとしている人がいるからこそです。



生活研究グループ 高石コズエさん

緋のカブ漬けは昔から伝わる大切な郷土料理。この味で季節を感じ、ふるさとを思い出す人も多いようです。これからも大事に守って残していきたいです。少しでもいいので、皆さんの家庭で作ってくださるようになればうれしい。家族だけだとおっくうなら、私たちみたいに仲間や隣近所と一緒に作るとういかもしれませんね。

(作り方)

- 1_ 茎と根を切った緋のカブを、きれいに洗って丸のまま容器に入れ、水をいっぱい入れて24時間浸す。
- 2_ ざるなどにうち揚げて厚さ3ミリに切る。
- 3_ 切った緋のカブと塩を漬物桶に交互に入れて、緋のカブの重さの2倍の重しをして2昼夜おき、水があがったら水を捨てる。そして緋のカブをざるに打ち上げ、また桶に入れて2時間重しをして水を出して水を捨てる。
- 4_ 水を切った緋のカブと砂糖、酢、カブス、唐がらしを桶に入れて混ぜ合わせて漬け終わり。
- 5_ 毎日1~2回付け汁が全体に浸るように上下を繰り返し混ぜる。
- 6_ 約10日で色も紅くなり食べられる。

1_ 切った緋のカブを漬物桶に入れていく 2_ 塩漬け後のカブをしっかり脱水する 3_ カブスを絞りやすいように少し皮をむき、搾る



5_ カブに砂糖、酢、カブスを混ぜたものを合わせる。すでに少し紅色に 6_ 出来上がった緋のカブ漬けを袋詰め



緋のカブ漬け

(材料)

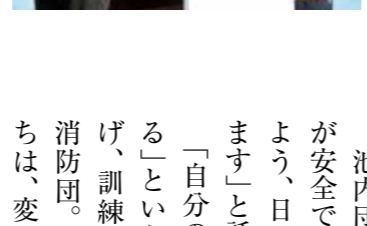
- 緋のカブ 4キロ
- 塩 200グラム
- 砂糖 1.2キロ
- 酢 3.5合
- カブス 5個
- 唐がらし 1~2個





5

1_オープニングセレモニーで演奏を披露した湧水太鼓の皆さん 2_全国大会で優秀賞を受賞した女性消防隊が操法を披露 3_威風堂々分裂行進する町消防団 4_表彰式 5_火点に向けて勢いよく放水する消防団員



308人の奉仕の心が守る町

平成24年松前町消防出初式

今年も恒例の消防出初式が行われた。

そこにあるのは脈々と受け継がれる郷土愛と消防魂。消防団は究極のボランティアだ。

私たちは消防団のおかげで安心して暮らすことができる。

無病息災、家内安全。年頭に大勢の人が願ったことではないでしょうか。同様に、安全で安心できる暮らしは、全ての人の願いです。

新年恒例の「松前町消防出初式」は1月8日、松前公園で行われ、松前町消防団員ほか関係者らが、災害のない安全・安心のまちづくりに決意を新たにしました。

9時から行われた式には、松前町消防団、松前消防署、松前町少年消防クラブから約500人、車両24台が参加。関係者が見守る中、多目的広場を威風堂々行進しました。式辞に立った白石勝也町長は「東日本大震災では、254人の消防団員が犠牲になりました。団員の皆様には平素から、自分たちで地域を守るという崇高な消防精神と強い責任感で、日夜献身的に活動してくれていることに感謝します」とあいさつ。

引き続き行われた表彰式では、活動に功績があった団員や団体に表彰状が伝達され、被表彰者を代表する使命を受けること。団員一人一人、「自分の地域は自分で守る」という崇高な消防精神が宿っています。

池内団長は「団員は町民が安全で安心して暮らせるよう、日々訓練に励んでいます」と話します。「自分の地域は自分で守る」という共通の目的を掲げ、訓練を重ね、連携する消防団。だからこそ、私たちは、変わらず災害のない

して足立文芳第7分団長が「これからもさらに消防精神に則り、業務に精励する覚悟です」と決意を述べました。

池内勝彦団長が「今後ますます複雑・多様化する災害に適切に対応できるよう、日頃の訓練に励み、笑顔あふれるまちづくりに貢献してほしい」と訓示した後、喜安茂副分団長の指揮で一斉放水を行いました。今年1年の無火災を誓いました。

消防団は、消防組織法に基づく消防機関。郷土愛の精神によって支えられた一般住民による組織です。火災や災害発生の際に受け入れられ、昼夜を問わず現場へ急行。災害現場の最前線で活動を繰り返します。

松前町消防団は、昭和30年に結成。平成15年には女性班も誕生し、現在308人の団員が地域を挙げて地域を守っています。長い歴史の中で、今も変わらず脈々と受け継がれているのが「消防精神」です。

消防団に入団すること、率先して郷土を守ることができています。これを当たり前に思わず、消防団を軸に町民同士が支え合えなければ、安全安心な暮らしは続きません。

消防団には郷土愛があります。奉仕の心が息づいています。安全・安心な暮らしを「支え合う」消防団の姿。そこから私たちが学ぶべきものは、少なくありません。

平成24年出初め式受賞者（敬称略）

知事表彰

上高柳班 分団長 足立 文芳
恵久美班 団員 大政 秀樹
松前消防署 司令長 大淵 悦雄

愛媛県消防協会長表彰

▶功績章

永田班 副分団長 渡部 恒夫

▶勤続章

横田班 班長 宮井 学
西高柳班 班長 榊山 春明
新立班 団員 星加 明義
徳丸班 団員 弓立 光貞
塩屋班 班長 上田 修

▶規律章

本団 班長 森 美代子
本団 班長 木下 公子
中川原班 班長 窪中 武徳
北川原班 団員 上田 清和

▶夫婦団員

南黒田班 分団長 横山 融
本団 団員 横山美弥子
上高柳班 団長 足立 文芳
本団 団員 足立 智恵
上高柳班 団員 仙波 正宏
本団 団員 仙波 里江

▶団体感謝状

北伊予小学校少年消防クラブ

▶家族内助の功労者

喜安 恵子さん 大西 桂子さん
池内 恵子さん 池内 眞実さん
大川 明美さん

▶会長表彰

第3分団 筒井班
第6分団 横田班

第9分団 北川原

町長表彰

▶個人表彰(消防団員歴1年以上)

南黒田班 横山 真次
北黒田班 武井 淳
宗意原班 山本 誠二
筒井班 武井謙太郎
中川原班 加藤 幸二
永田班 澤田 幸作
永田班 日野 貴之
横田班 澤田 啓之
大溝班 武智 貴勇
大溝班 西村 裕造
昌農内班 大野 真史
西古泉班 門田 翼
西高柳班 高田 洋一
西高柳班 兵頭 康司
塩屋班 川本 和孝

▶優良班表彰(平素の消防団活動で他の模範となる班)

宗意原班 本村班
中川原班 永田班
大間班 西高柳班

▶特別班表彰

(全国女性消防操法大会優良賞)

女性班

▶一般協力者表彰

植田 悦子さん
永見 時子さん
植田 志津子さん

団長表彰

松前方面隊 第3分団
北伊予方面隊 第6分団
岡田方面隊 第8分団



松前町消防団長 池内勝彦さん

消防団員は、町民が安全で安心して暮らせるよう、日頃の訓練に励んでいます。今後も自主防災組織と連携して、安全・安心なまちづくりに努めたい。防災対策で大切なことは、町民一人一人が「防災」を自分のこととして考え、備えること。大きな災害はいつ発生してもおかしくありません。町民一人一人が危機意識を持って、災害に備えてほしい。みんなの力で安全安心な町をつくりましょう。

20年目の冬に故郷で見せた喜びと感謝

平成24年成人式 ～絆～

大人になったことを自覚し、自ら生きぬこうとする青年を祝いはげます「成人式」。
今年も華やかに行われ、335人の新成人たちが大人への一歩を踏み出した。



1_お礼の言葉を述べた後、町長と握手をする重川和真さん 2_実行委員は小学校入学から中学校卒業までをまとめた思い出のアルバムを作成。コメントをつけながら紹介した 3_会場はあでやかな着物に身を包んだ華やかな女性であふれた 4_梶原大輝さんは今年のテーマ「絆」について説明し、呼び掛けた

家族、先生、地域の皆様にご感謝します。東日本震災後には、世界中から支援が届けられ、人の心の温かさ、絆の深さを感じました。このような心の温かさ、絆を見習い、社会に貢献できるよう日々努力していきます」とお礼の言葉を述べました。

実行委員長の後藤健二さんは「復興支援になればと、当日義援金を集めました。絆の深さを感じました」とにっこり。県外在住ながら実行委員を務めた谷口和也さんは「離れてみて家族や帰る場所があるありがたさを再認識しました。故郷があるから安心して頑張れます。自分を作ってくれた家族や故郷はかけがえのない存在。大事にしたい」と話していました。

大人への一歩を踏み出した新成人たち。これまで支えてくれた家族、先生、地域の人に感謝しました。県外在住者は故郷や旧友への思いも大きく、人の温かさ、絆の深さを再認識しました。彼らがこれからの松前町を「築き

家族があって20歳を迎えられました。なかなか面と向かっては言えませんが、感謝の気持ちでいっぱいです。何にでも挑戦できる大人になりたいと思い、実行委員に申し込みました。実行委員みんなで話し合っ、今回のテーマは絆としました。震災があって大変な状況だから、松前町の新成人が一つになってできることをしたくて、当日は義援金を集めました。これからも家族や仲間を大切にしていきたいです。



成人式実行委員長 後藤健二さん



5_久々の再会に笑顔がこぼれる 6_記念撮影をする松前校区の女性たち 7_恩師と記念撮影 8_式を企画・運営した実行委員の皆さん

大事なものは、
当たり前私たちの暮らしの中で生き続けている。

成人式という節目に新成人たちが感じたように、「居る・有るだけでありがたい」という存在に気付いていいますか。自分を取り巻く環境が目の前にあることは、決して当たり前ではありません。

先人が、自然とともに生き、培ってきたものを。人を思いやり、支えあって築き上げてきたもの。新しいものでも、珍しいものでも、すごいものでもなく、いつも変わらない故郷、家族、友人…。

当たり前のように私たちの暮らしの中で生き続けているものは、私たちにとってかけがえのないものであるということ、再認識して暮らしていきたいでしょう。

変わらない場所、人、もの。大事な「宝」です。その宝を生み出しているのは一人一人の「心」です。

たくさんの「宝」を「守(まも)り」ながら、互いに「支(た)さ(さ)え合い」ながら前進することが松前町の価値を「築(きず)き」ます。

出初式同様、新春を彩る風物詩「成人式」。「平成24年成人式「絆」」は、出初式が行われた同日の午後、松前総合文化センターで開かれ、あでやかな着物やスーツに身を包んだ新成人たちが、晴れの日に臨みました。

式には新成人335人のうち302人が出席。会場は友人との再会を喜び合う新成人であふれました。開会に先立ち、実行委員の梶原大輝さんは「今回のテーマは絆です。人とのつながりに感謝し、この気持ちを大切に、みんなで大きな絆をつくりましょう」と呼び掛けました。白石勝也町長は「皆さんの絆を大切に、今後の松前町を背負って、いくことを忘れず力いっぱい生きてください」と激励しました。

式は今年も実行委員手作りのプログラムで進行。学生時代を振り返る「思い出のアルバム」では、母校や先生を懐かしみ、友情をもう一度思い出だす新成人の姿が見られました。式の結びでは、新成人を代表して重川和真さんが「今日まで育ててくれた